

本当のファッション

「はい、すいません。いつもご迷惑をおかけします。私からもよく注意しておきますから。」
母が学校の担任の先生からの電話でしきりに謝っている。

電話の内容は予想が付いた。スカート丈のことに。今日の陸上部の部活の帰りに、校門を出ると、明美は友人達とスカートを三つ折りにし、短くして下校していた。そのことを誰かが告げ口をしたにちがいない。

明美は、このあと母からこっぴどく説教を受けることを覚悟した。

「なんで私だけ。みんなだつてしているよ。」

「みんながしていればいいの？校則でしょ。だいたい、そんなに足出して、かっこいいとも思っているの？」

「ひどい！お母さんや先生は古いのよ。」

いつものように喧嘩になつて、明美は部屋へ飛び込むと、ファッション雑誌を広げた。明美にとってファッション雑誌を見ながら色々な服のデザイン画を描くことが一番好きな時間だ。明美は、おしやれが大好きで、友だちからもよくセンスが良いと褒められる。明美は、ファッションデザイナーになることが自分の将来の夢になっていた。



「明美、ちょっと見て。懐かしいものが出てきたよ。母さんの中学校の卒業アルバムよ。」

次の日の夜、母が古ぼけた本のようなものを持って部屋に入ってきた。

「へえ、見せて見せて。」

明美の母は、明美が通っている安浦中学校の卒業生だ。親子で同じ中学校の出身だった。

「母さんが中学校の時って、今の制服とデザインが違うのね。昔はこんなデザインだったのかあ。」

「そうよ。母さんが中学生のころの制服は、ボックス型のプリーツスカートだったのよ。」

「色も紺だったんだ。私たちが着ている今の制服に変わったのは、いつ頃なの？」

「そうねえ、二十年くらい前かしら。今、明美が着ている制服をデザインしてくれたのは、安浦中学校の卒業生でファッションデザイナーをしている人よ。甲賀真理子さんっていつてね。今も活躍しているらしい有名な方よ。制服のデザインを変える時に、卒業生ということをお願いしたらしいのよ。」

明美はそれを聞いて目を輝かせて言った。

「ねえ、お母さん、その人と知り合いなの？どうにかして会えないかなあ？」

それからしばらくして、お母さんが学校帰りの私をうれしそうに迎えてこう言った。

「甲賀さんに思い切つて電話したらね。とてもいい方だね。電話でなら喜んであなたにお話して下さるって！」

こうして明美は甲賀さんとお話ができることになった。約束の日、学校から跳んで帰った明美は制服姿のまま、どきどきしながら受話器を手にした。明美は甲賀さんに対してうまく行けば弟子入りを願ひしようという決意を胸に秘め、デザイン画を手で電話をかけた。

「明美さん？はじめまして！甲賀真理子です。そうそう、お母さんから聞いたわよ。あなたも陸上部だつてね。私もそうだったのよ。うれしいなあ、私の後輩かあ。」

とても気さくな感じだったので、明美は思い切つて核心の質問をいきなりぶつけることにした。

「甲賀さんは、弟子にとるとしたら、どんな人を弟子にしますか？」

「おもしろい質問するわね。そうね、やっぱりセンスがあるかないかがポイントね。」

明美はその言葉を聞いてうれしくなって、自分の描いたデザイン画を手を取った。

「センスがあるかないか、先生はどうやって見分けられるんですか？やっぱりデザイン画とかを見たら分かりますか？」

明美は許しが出たら描きためた自慢じまんのデザイン画を送る気でした。「そうね。でも、そんなもの見ないでも中高生なら簡単に見分ける方法があるわね。」

「え？どうやって見分けるんですか。」

「中高生なら制服を着ているでしょ。どういう着こなしをしているか分かるわね。時々、いるでしょ。スカートを短くしたり、いろいろ工夫したりして目立っている生徒が……。」

明美は有頂天になった。自分は学校の中でも一番、工夫している自信があった。スカートを短くしている生徒は他にもいるが、自分のようにボタンや小さなアクセサリーをこっそりつけていたり、目立たないところでもおしゃれをしたりしている生徒はいないからだ。個性のない制服を一番个性的に着こなしている自信が明美にはあった。

「そういう人はまず問題外ね。」

明美はその言葉に耳を疑った。

「ファッションというのはね、周りの人へのマナーなのよ。TPO*TPOって言うじゃない。自分の服装を、周りの人がどんなふうに感じているか、そのことを敏感に感じ取れる能力が本当のセンスというもののよ。自己満足でおしゃれをした気になって、その結果、周りの人に嫌な気持ちを与えていることに無神経な人っているでしょ。そういう人に限って自分にセンスがあると思ひ込んでるからおかしいわよね。」

甲賀さんの言葉が自分の胸にぐざりと突き刺さるのを明美は感じた。

「それに制服というのはね、同じだからいいの。同じ制服だから仲間意識が芽生える。そしてみんなできちんとさわやかに着こなすことで、その仲間意識は本物になるし、結果的に会社や学校にいいイメージを持ってもらえることになるわよね。そういう制服のもつ意味を理解しないで、ちゃんと着こなせない人というのは、ファッションというものが一番理解できていないし、最悪のセンスの持ち主と言えるわね。」

（最悪のセンス？この私が？）

明美はショックで頭を打たれたような気持ちになった。

「知っていると思うけど、私は安浦中の制服をデザインさせてもらったのよ。みんながちゃんと着こなしてくれるように、清潔感があり、あきのこないデザインを意識して作ったんだけど、みんなはちゃんと着こなしてくれてるかなあ。」

甲賀さんが電話の向こうから自分の制服姿を見ているような気がして、明美は思わず短くしたスカートすその裾はもとを抑えた。

「後ね、制服の良さって、個性が出せないからいいんだってことに気が付いているかしら。」

（個性が出せないからいいってどういうこと？）

戸惑う明美に甲賀さんは、自分の作った制服への思いを語り続けた。

「制服で個性が出せないから本当の個性が伸ばせるのよね。学生時代というのは体も心も一番伸びる時期よね。私は、だからこそ活動しやすく男女の形もあまり変わらないことを考えてデザインさせてもらったんだけど、どうかしらね。みんな気にいってってくれるかしら……。」

それから約三十分ばかり話をしたが、結局、明美は最後まで弟子入りの話を切り出せないまま電話を終えた。そして泣きそうな顔で母を見た。

「母さん、どうしよう。甲賀さんに、私の思いをみんなにも伝えてって頼まれちゃった。」

次の日の朝、明美は、いつものようにスカートを二つ折りにしようとして、ふと自分を見ている商店街の人の視線を感じて、その手を止めた。甲賀さんの言葉を思い出しながら……。



*TPO（ティーピーオー）… Time（時間）、Place（場所）、Occasion（場合）の頭文字をとって、時と場所 場合に あった方法という意味。